

『羅生門』と一九世紀末～二〇世紀初頭の老婆表象 ——ジェロントフォビア (gerontophobia) の系譜——

A Genealogy of Gerontophobia: *Rashomon* and the Contemporary Image of the Old Woman

倉田容子

The old woman who appears in Ryunosuke Akutagawa's *Rashomon* (1915) is one of the most famous and horrifying images of old women in the history of Japanese modern literature. In *Rashomon*, the old woman crouches amidst a heap of corpses, surrounded by their stench. She is depicted through negative animal metaphors, such as "flesh-eating bird", "crow", "toad", and so on. This imagery is seen as consistent with the *Genin's* psychology with his perspective at the center of the story. However, from an intertextual view of modern literature, I try to deconstruct the consistency of this rhetoric, which ties three elements: negative visual and audible expressions that suggest the old woman's otherworldliness, the *Genin's* hatred and contempt for the old woman, and his violence toward her. As a result, I demonstrate that the image of the old woman, which is often seen to derive from classical literature, is connected with contemporary gender / aging standards, and that the *Genin's* psychology is also inseparable from those standards.

芥川龍之介『羅生門』(1915)に登場する老婆は、「死骸」の臭気が充溢する場で、「死骸」の中に蹲りながら、「死骸」と向き合う形で登場し、さらに「肉食鳥」「鴉」「墓」といったネガティブな比喻表現によって造形されている。このような老婆表象は、従来、下人の心理を中心とするストーリーとの整合性において意味づけられてきた。しかし本稿では、むしろその整合性を脱自然化すること、すなわち妖怪や魔物を連想させるネガティブな視覚的・聴覚的表現と、老婆に対する下人の「憎悪」や「侮蔑」といった感情、さらに下人の老婆に対する加害行為という三つの要素を結びつける暴力的なレトリックの回路を、同時代的なインターテクスチュアリティの観点から解体することを試みる。それにより、これまで古典文学に起源を求められてきた老婆表象が、同時代的なジェンダー／エイジング規範と響き合うものであり、下人の心理もまたそうした規範性と不可分なものであることを明らかにした。

Key words : gender / aging old woman othering
キーワード : ジェンダー／エイジング 高齢女性 他者化

はじめに

芥川龍之介『羅生門』(「帝国文学」一九一五・一一)に登場する老婆は、日本近代文学史上、おそらく最もよく知られた、最もおぞましい老婆像であろう。

下人は、それらの屍骸の腐爛した臭気に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、殆悉この男の嗅覚を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて、其屍骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その屍骸の一つの顔を覗きこむやうに眺めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の屍骸であらう。

(圏点引用者、以下とくに断らない限り同じ。149頁)

老婆は、「屍骸」の臭気が充溢する場で、「屍骸」の中に蹲りながら、「屍骸」と向き合う形で登場する。本稿は、この印象的な老婆像の造形、そして老婆に対する下人および語り手のまなざしに潜むジェロントフォビア (gerontophobia) を読み解くことを目的とする。

ジェロントフォビアとは、高齢者に対する根拠のない恐れや憎悪を意味する心理学・精神医学用語であり、一般に「老年恐怖症」「老人嫌悪」などと訳される¹。エイジズムという言葉が人口に膾炙した今日ではあまり使われなくなった用語だが、アードマン・B・パルモア氏はジェロントフォビアをエイジズムの一例と位置づけ、「正常な機能の妨げとなるような極度の、神経症的な不安」²と定義している。後述するように、『羅生門』における老婆をめぐる語りには、同時代的なジェロントフォビアが反映され、また同時にそれを再生産していると思われる。

『羅生門』研究史において、老婆イメージの造形は主として二つの観点から論じられてきた。一つは、「屍骸の中に蹲つてゐる」という登場の仕方や、「肉食鳥のやう

な、鋭い眼「鴉の啼くやうな声」「墓のつぶやくやうな声」(152頁)などの隠喩表現に着目し、その怪異性にアプローチしたものである。芥川の「妖怪趣味」を指摘した長野菅一氏³、『今昔物語集』の「頭身ノ毛太ル」および「頭毛太リテ」の用例から「下人は、原話の「盗人」と同様に、老婆を魔物として見ていた」とする清水康次氏⁴、「死骸の醜怪な描写の後に老婆の形象を重ねることにより、その奇怪性・醜怪性を強く印象づける意図」と「老婆を生

の極限状況下で生存のために醜悪な姿をさらす弱者としてではなく、むしろ死者の側から見られる方が相応しい存在、死人ばかりの世界に最も相応しい住人として登場させる意図」を指摘した勝倉壽一氏⁵、巖谷小波編『日本昔噺』(博文館、一八九四・七～一八九六・八)シリーズの「羅生門」「安達ヶ原」や浮世絵師大蘇(月岡)芳年の画・挿絵、吉井勇の戯曲『囊の女』(「スバル」一九一一・三)などの影響を指摘した石割透氏⁶など、多くの論者がその怪異性に言及している。

一方、「その髪の毛が、一本づゝ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづゝ動いて来た」(150頁)、「下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た」(152頁)といった下人の心理が示すのは、「妖怪」や「魔物」とは明らかに異質な老婆像である。この下人の心理を物語る語りを重視する見方が二つ目の観点であり、「大正初年に於けるアナルヒズムの理論」⁷の自己矛盾を形象化したもの、「彼を負の世界へ、が同時に生の世界へいざなうメフィストフェレス」⁸、「〈許すべからざるもの〉の化身ではなく、卑小なただのぬすびと」⁹など、その象徴性や意味性をめぐる議論は枚挙に暇がない。

このような研究史から浮かび上がるのは、『羅生門』の語りに底流する老婆に対する重層的な感情、「妖怪」とも「魔物」とも取れる超越性・異質性を覚える一方で、同時に「憎悪」や「侮蔑」を抱くという、不安定で強烈な感情の波である。重要なのは、こうした感情が、複雑に交錯する形でテキストに表れていることだ。三田村雅子氏は「猿」「鶏」「肉食鳥」「墓」という比喩の変遷を「下人の意識ならざる前意識での判断、意味づけの結果」¹⁰としているが、ここでは個別の比喩表現を下人の心理を中心とするストーリーとの整合性において意味づけるのではなく、むしろそうした整合性を脱自然化することを試みたい。すなわち、「屍骸」との親和性や「肉食鳥のやうな、鋭い眼」「鴉の啼くやうな声」「墓のつぶやくやうな声」といったネガティブな視覚的・聴覚的表現と、老婆に対す

る「憎悪」や「侮蔑」といった感情、さらに「狽ち倒した」(151頁)「引剥」(153頁)という加害行為、この三つの要素を結びつける暴力的なレトリックの回路が、どのようなプロセスを経て生み出されたものであるのかを検討していく。

本稿では、古典や昔話との比較ではなく、同時代的なインターテクスチュアリティの観点から『羅生門』における老婆表象および下人の心理プロセスを再検討する。それにより、一見すると古典文学に起源を持つかのように見えるこの老婆表象が、同時代的なジェンダー／エイジング規範と響き合うものであり、下人の心理もまたそれらの規範性と不可分なものであることを明らかにしていきたい。

一、『羅生門』の老婆表象の特異性

まず、『羅生門』の老婆像の独自性を明確にするため、典拠とされる『今昔物語集』第二九第一八「羅生門登上層見死人盗人語」を参照しよう¹¹。

盗人、怪ト思テ連子ヨリ臨ケレバ、若キ女ノ死テ臥タル有り。其ノ枕上ニ火ヲ燃シテ、年極ク老タル軀ノ白髪白キガ、其ノ死人ノ枕上ニ居テ、死人ノ髪ヲカナグリ抜き取ル也ケリ。(336頁)

「軀」の容貌に関する記述は「年極ク老タル」と「白髪白キ」のみである。引用文の様子を見て「盗人」は「此レハ若シ鬼ニヤ有ラム」(336頁)と思ひ恐れをなすが、ここで問題なのは老婆の容貌ではなく、「死人ノ髪ヲカナグリ抜き取ル」という行為の異常性であろう。これに対して、芥川の『羅生門』においては「檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな」「肉食鳥のやうな、鋭い眼」「鴉の啼くやうな声」「墓のつぶやくやうな声」などと老婆の容貌が詳細に語られており、行為よりも容貌そのものの醜怪さが焦点化されている。

また、石割氏¹²が「日本昔噺を新たに解釈した作品の系列」として『羅生門』との連関性を指摘した博文館『日本昔噺』シリーズにおいては、鬼・鬼婆の化身である老婆は当初「品の好いお婆さん」「此方の旦那様のお幼少い時分、お乳をあげた乳母」(『羅生門』一八九五・一一)、「人の好き・うな老婆さん」(『安達ヶ原』一八九六・一)として登場する¹³。老婆の姿は、それ自体が恐怖の対象なのではなく、むしろ安心感や懐かしさを喚起するがゆえに人を欺くのに適した姿と見なされているように思われる。

すなわち、これらのプレテキストと『羅生門』の老婆

表象の差異として、〈老いた〉〈女性〉の容貌それ自体に対する極端にネガティブな評価を指摘することができる。「その髪の毛が、一本づ、抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづ、消えて行つた」(150頁)とあるように、彼女が鬼でも鬼婆でもなく、ただの老婆に過ぎないことはすぐに明らかになる。しかしその後、下人に「狃ち倒」され、「唯今時分、この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しさへすればいいのだ」(151-152頁)と迫られたときの老婆の容貌もまた、憐憫よりは嫌悪感を喚起するものとして造形されている。

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ちつとその下人の顔を見守つた。眶の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉仏の動いてゐるのが見える。(152頁)

「屍骸」との親和性に加え、「皺で、殆、鼻と一つになつた唇」「尖つた喉仏」といった微細な描写、そして「肉食鳥」の比喩を用いて語られる老婆像は、鬼や鬼婆といった怪異的な存在ではないにもかかわらず、徹底的に異物化されていると言える。ここでは臉の色や皺といった肉体的な〈老い〉の有徴性それ自体が、怪異性へと置換されているのである。

ただし、〈老いた〉〈女性〉の容貌に対するこのようなネガティブなまなざしは、必ずしも『羅生門』に独自なものではない。次に、日本近代文学史における老婆表象を概観し、同時代の“老婆もの”に目を向けることで、『羅生門』の老婆像生成のプロセスを検討したい。

二、異物としての老婆像

異物化された老婆像を『羅生門』以前の日本近代文学に探せば、一九〇八年に辿り着く。一九〇八年は、四月一三日から七月一九日まで「読売新聞」紙上で連載された田山花袋『生』を筆頭に、徳田秋聲『二老婆』(「中央公論」一九〇八・四)、岩野泡鳴『老婆』(「趣味」一九〇八・五)と、計三つの“老婆もの”が発表された、老婆の表象史におけるエポック・メイキング的な年であった。これらの三作には、それ以前の小説テキストに見られた類型的な老婆表象とは異なる、〈老いた〉〈女性〉の身体性に対する一定のまなざし、および、その再現=表象のレトリックを見ることができる。

一般に日本近代文学は「青年の文学」などと言われるこ

ともあるように、中高年女性を主人公に据えた小説は決して多くない。しかし脇役として、物語の片隅には常に様々な階級の中高年女性の姿があった。その断片的な表象を追っていくと、文学ジャンルの枠を超えていくつかのステレオタイプが存在することに気付かされる。なかでも明治期の小説テキストにおいて最も顕著なのは、〈乳母〉と〈老母〉である。

中高年の乳母が小説に頻出するのは主に一八九〇年代くらいまでであり、彼女たちは「忠」をその第一義的な属性としている。尾崎紅葉『南無阿弥陀仏』(「百花園」一八九九・五・一〇～六・二〇)や樋口一葉『闇夜』(「文学界」一八九四・七～一一)、三宅花圃『八重櫻』(「文藝倶楽部」一八九六・五)、北田薄水の『乳母』(「文藝倶楽部」一八九六・五)などには、主家が没落した後も変わらぬ忠誠心を抱き続け、主人公の「お嬢様」に仕える乳母たちが登場する。これらはいずれも、近代的雇用契約に移行する以前の、封建的な階級意識の色濃い女性家事使用人の位相を垣間見せるものであると言える。逆に、乳母が小説から姿を消しはじめる時期は、現実に「下女の払底」が問題化しはじめた時期と概ね一致している。夏目漱石『坊っちゃん』(「ホト、ギス」一九〇六・四)では、下女の清が「坊っちゃん」の「片破れ」などと語られているが、ここにも封建的な階級意識が希薄化しつつあった現実の家事使用人をめぐる状況との連関性が認められよう¹⁴。

一方、老母については、二葉亭四迷『浮雲』(金港堂、一八八七・六、一八八八・二、「都の花」一八九九・七～八)や森鷗外『舞姫』(「国民之友」一八九〇・一)をはじめとして、一八九〇年代くらいまでは「孝」の対象としての老母像が目立つ。『浮雲』や『舞姫』では老母は物語に直接姿を現すことはなく、後者では「余」の回想において、前者においては「写真」という形で次のように象徴化されて語られる。「御存知の通り文三は生得の親おもひ、母親の写真を見て、我が辛苦を嘗め艱難を忍びながら定めぬ浮世に存生らへてゐたる、自分一個の為而已でない事を想出し、我と我を叱りもし又励しもある事何時もへ」(『浮雲』第五回)¹⁵。また、山下悦子氏が「姑の嫁いびりがかろうじて成功した最後の事例」¹⁶と位置づけた徳富蘆花『不如帰』(「国民新聞」一八九八・一一・二九～一八九九・五・二四)¹⁷の武男の老母は、肺結核の浪子を離縁した後、最愛の息子に「阿母、あなたは、浪を殺し、加之此武男を御殺しなすつた。最早御眼にかゝりませぬ」(中篇(十)、342頁)と去られ、「吾違算を悟り、同時に所謂母なるものの決して絶対的権力を其子の上に有するものにあらざるを」(下篇(二)の三、363-364頁)知ることになる。老母の「違算」とは、「母は武男が常によく

孝にして、吾意を迎ふるに踟躕せざるを知りぬ。知れるが故に、其浪子に対するの愛固より浅きにあらざるを知りつつも、其両立する能はざる場合には、一も二もなく彼愛を棄て、此孝を取るならんと思へり」(下篇(二)の三、363頁)、すなわち「孝」の絶対性を自明視していたことを指しており、逆説的にそのイデオロギーが健在であることを示すものとなっている。

まとめると、乳母にせよ老母にせよ、一八九〇年代くらいまでの小説テキストにおいて中高年女性が語られる際には、フレームワークとして「忠」や「孝」の観念がある程度機能していたと思われる。時代が下るにつれて『坊っちゃん』や『不如帰』のような変則的なバリエーションも見られるようになるが、そのフレームワークは依然として強固に語りを規定していたと言える。

ところが、「自然主義」の興隆に伴い、こうしたフレームワークが揺らぎはじめる。それを端的に示すのが、一九〇八年の一連の“老婆もの”である。まず、花袋『生』における老母の身体性に注目したい。

蒲団は成だけ清潔にして、敷布は絶えず洗濯するやうにして置くが、死に近い病人には、床摺れの靡欄や長い間の汚れた皮膚の悪い臭気がそことなく纏はつて、吐く呼吸も健康者の鼻には夥しく不快に感ぜられる。従つて蠅が多い。打つても打つても煩さく其周囲に集つて来る。(二十四、151-152頁)¹⁸

悪臭を発生し、蠅のたかる、衛生という近代的制度を逸脱した老母の病んだ身体は「健康者」=他の家族構成員から分断されている¹⁹。ここでは老母は、観念的な「孝」の対象である以上に、老いゆく身体を生々しくさらけ出す、不快な異物として語られている。

とくに注意したいのは、老母が「死に近い」存在として、「汚れた」「悪い臭気」「不快」といった否定語とともに語られている点である。「臭い」や「汚ない」は、今日でも子供たちのいじめの場で加害者の側から頻繁に発される言葉だが、これらの言葉について赤坂憲雄氏は、「ここでは現実的な匂いや不潔さではなく、異物に接したときのかすかな不安や怖れが、そうした嗅覚や視覚にじかに触れてくる不快感の表明としての、「臭い」「汚ない」といった特定の否定語をまねき寄せているかにみえる」²⁰と指摘している。『生』においても、「死に近い」存在への不安や恐怖感、そして「何うせ死ぬんなら、早く死んだ方が好い」(二十七、170頁)という「健康者」たちの心情が、「悪い臭気」という「排除のための空虚な記号」²¹を通して露骨に表明されているように思われる。第二十五章では、

末期の老母が行燈の陰に「和尚様」が坐っていると申し、家族を怯えさせるという怪談めいたエピソードも語られており、物語が展開するにつれて老母の異質性は補強されていく。

このような老母像が生み出された背景として、花袋の言う「母親に対する忌憚なき解剖」²²すなわち自然主義の方法論に加え、家族制度の再編成という歴史的コンテクストを挙げることができよう。『生』の作品内時間は一八九九年前後と目されているが、この頃はちょうど一八八九年から一八九二年まで続いた民法典論争が延期派の勝利という形で終結し、その後新設された法典調査会で起草された新民法草案(明治民法)が公布・施行された時期にあたる。穂積八束の「民法出デテ忠孝亡ブ」(『法学新報』一八九一・八)でよく知られているように、民法典論争の争点の一つは民法と旧道徳との矛盾にあったが、老親を含めた親族の扶養権利義務についても同様の議論が交わされた²³。法的言説と文学的言説との連関性についてはより個別的な検討が必要だが²⁴、『生』の老母像の形成に「忠孝」を相対化する時流が一定の影響を持っていたことは間違いないと思われる。

『生』と同年に発表された徳田秋聲『二老婆』と岩野泡鳴『老婆』もまた、老婆を物語の中心に据えた小説である。これらに登場する老婆は語り手にとって赤の他人であり、『生』の老母表象ほどの倫理的なインパクトはないが、その分、より端的に〈老いた〉〈女性〉の異質性が前景化されている点で注目される。

『老婆』²⁵は、熱海へ湯治に来た語り手「僕」が、今年八九歳になる老婆が伊豆山神社の門際に茶店を出していると聞き、同宿の老人とともに「好奇心に駆られて」(65頁)神社を訪れる短編小説である。この小説にも、寝ていた老婆が急に「お社の石段が崩れて来る」(70頁)と言って起き上がり、「僕は、この一言を聴いてぞつとすると同時に天地の滅亡、世の終りの有り様が僕の心を横切つた」(同前)という怪談めいた件がある。しかしその後、「僕」たちが置いていった餅菓子を平らげた老婆が吐瀉するエピソードが語られ、「僕」は老婆の生命が「喰ひ氣」(71頁)のみによって保たれているという「新しい事実を発見」(同前)する。ここでは、老婆は死に近い存在として怪異性を意味づけられつつ、同時に本能的で卑小な人物として造形されている。

『二老婆』²⁶は、語り手「自分」がかつて妻とともに下宿していた家の「お榮婆さん」と、その近所に住んでいる「お幾婆さん」という二人の老婆を主人公とする。二人の老婆はともに生活に窮しており、一人が自殺未遂、もう一人が自殺を遂げるところで物語は終わる。この小説で

も老婆を語る際に汚れ物や吐瀉物が印象的に用いられているが、より注目すべきは比喩表現である。「お栄婆さんは相変わらず、テラへ蜻蛉のやうに光る大きな首を据え、薄い目を瞠つて、一日モンゾリともせず坐っている」(42頁)、「お幾婆さんは、お栄婆さんから見ると、年が二つ三つ上である。顔のちんちくりんな、髪の色が悪い婆さんで、兎のやうな赤い目をしてゐる」(44頁)「お幾婆さんの体は、車鼠のやうにクルへ廻つてゐた」(同前)など、虫や動物を用いた比喩が見られる。『羅生門』研究において「猿」「鶏」「墓」といった比喩は幾度も議論の俎上に上ってきたが、同時代の文学的言説において既に老婆と動物を連結する表現の回路が開かれていたことが確認できよう。

三つのテキストに表象された老婆は、いずれも『羅生門』ほど極端ではないにせよ、「奇怪性・醜怪性」²⁷を意味づけられた、「死人ばかりの世界」²⁸に近い存在としての老婆像である。同時に、これらに特徴的なのは、死に近いことが畏怖や憐憫に繋がるよりも、むしろ臭気や吐瀉物、汚れ物といった不快な表象を呼び寄せ、またその言動が侮蔑や嫌悪を喚起するものとして語られていることだ。ジュリア・クリステヴァ氏²⁹は、「人がおのれ自身となるために他人との相同化を図る手段としての模倣行為 (*le mimétisme*)」(20頁)すなわちラカンの「鏡像段階」以前の論理的にも時間的にも原初的な「オブジェクション棄却作用」として、「ある食物、汚物、屑、塵芥に対する嫌悪感。私の身を守る痙攣や嘔吐。汚穢、掃きだめ、不浄から私を引き離し、身をそむけさせる反感や吐き気」(5頁)を挙げているが、そうした前-記号的な「オブジェクト」(おぞましきもの)をまさに「まねき寄せ」³⁰るようにして、老婆イメージが形成されていると言える。

『羅生門』に戻ろう。前章で見た『羅生門』の老婆表象、屍骸にまみれた登場の仕方や、動物や鳥類の比喩を用いたネガティブな視覚的・聴覚的表現、そして眶の色や喉仏、皺の表情までも詳述するミメシス性の高い描写には、これらの「自然主義」の“老婆もの”との連関性が認められないだろうか。芥川は『あの頃の自分の事』(『中央公論』一九一九・一)において、東京帝国大学在学中に久米正雄らとの議論で「田山花袋氏が度々問題に上つた」(124頁)とし、「我々は氏の小説を一貫して、月光と性慾とを除いては、何もかも発見する事は出来なかつた」(124頁)と述べている。しかし、『羅生門』に見られる〈老いた〉〈女性〉を醜悪で動物的な「死人ばかりの世界に最も相応しい住人」³¹として捉えるまなざし、そしてその再現=表象のレトリックには、芥川が「冷笑」(124頁)を伴いながらも受容した花袋らの「自然主義運動」と連続する

二〇世紀初頭のジェンダー／エイジング規範をたしかに見ることができる。

三、老婆殺しの系譜

ここまで主にレトリックの観点から老婆表象の系譜を見てきたが、下人の「憎悪」が加害行為へと転化する心理プロセスを明らかにするためには、もう一つ別の同時代的な老婆像を見る必要がある。それは内田魯庵によって翻訳されて以来多くの文学青年に愛読されたドストエフスキー『罪と罰』(卷之一=内田老鶴圃、一八九二・一。卷之二=内田老鶴圃、一八九三・二。後に改訳し、卷之一・二を合わせて「前編」として丸善より一九一三年七月刊行)に登場する金貸しの老婆(アレーナ、イワーノウナ)である。

『罪と罰』と『羅生門』の類似性については、既に大場恒明氏³²・宮坂覺氏³³らの指摘がある。とくに老婆に関して、芥川龍之介文庫の英訳本 *Crime and Punishment* と『羅生門』を比較検討した大場氏は、その容貌をめぐる表現の類似性を指摘している。魯庵訳『罪と罰』³⁴を参照すると、老婆については「皺枯れて痩せこけた」(14頁)体や「ギラへ人を射る様」(同前)な眼光、そして「雞の足の様に」(同前)細い首といった表現が見られ、たしかに『羅生門』における「痩せた」「鶏の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕」「肉食鳥のやうな、鋭い眼」「細い喉」などの表現と酷似している³⁵。

だが、容貌の類似性以上に重要だと思われるのは、宮坂氏が共通点の一つとして指摘した「老婆に加害する青年」³⁶という両テキスト最大の骨子の部分である。ここではとくに両者の加害動機に注目したい。竹腰幸夫氏は『羅生門』の老婆は「ただいじめられているだけなのではないか」³⁷と指摘し、また下人の「引剥」(153頁)に実質的な必然性を認めがたいことは多くの論者の指摘しておりだが³⁸、『罪と罰』のラスコーリニコフの犯罪もまた「金子」のためである以上にヘイトクライムと呼ぶべき性質をもっている。まず、ラスコーリニコフの運命に「恐るべき影響」(88頁)を与えた、近所の料理屋で偶然隣り合った大学生の言葉を引用しよう。

見給へ一方に訳の解らぬ、因業な、横道な吝嗇な婆アがいる。誰の役にも立たん処か、却て一般に害毒を流す奴で、何の為に自分が生存してるのか少しも知らん剛突張だ。(略)で、又一方を見ると、有為の少年が唯朝暮の生計が出来ぬばかりで中途に挫折して首うなだれてゐる。是は其処此処で出会ふ事実

で、かの因業婆アが寺に喜捨する金子があれば千百の立派な事業が挙る。飢餓に瀕し、魔界に墮ち、罪悪を犯し、不幸に沈む族一「ダース」を其金子で救ふ事が出来る。殺人は素より大罪であるが、此婆アを殺して其金子を奪つて他の善事に使用するは人道に外れた事ではない。(圏点原文通り。86-87頁)

ラスコーリニコフは、この大学生の発言に促されるかのようにして殺害を実行する。この発言にも老婆に対する激しい憎悪は見られるものの、この時点では、憎悪それ自体が殺害の動機となっているわけではない。しかし、老婆殺害後、ラスコーリニコフの内面世界においては次のような論理の転換がおきる。

老婆奴悉く出来損なってる！全体片輪なんだ。自己は又成るだけ早く尋常の垣を越えんとした！自己が殺したのは人間でなくて主義だ！(337頁)

ここでは、彼女が老婆であることそれ自体が殺害を正当化する根拠となっている。老婆は、「悉く出来損なってる」と蔑まれつつ、同時にラスコーリニコフを支配する強大な権力をもった「主義」を投影され、殺さなければ彼のアイデンティティが損なわれるような不安の源として、まさにフォビアの対象すなわち「正常な機能の妨げとなるような極度の、神経症的な不安」³⁹を呼び起こす存在として語られているのである。

青年による老婆殺しのモチーフは日本では小説ジャンルの枠を超えて再生産されたが⁴⁰、なかでも正宗白鳥『老婆殺し』(「新小説」一九一八・一)⁴¹はその殺害動機の捩れまでもが踏襲されている点で注目される。『老婆殺し』の主人公藤田圓吉は、決りかけた縁談を息子の上司に譲られたことで同窓の古屋の母である老婆に恨みを抱いている。しかし、「老婆の姪のおさだとは一二度他所々しい口を利いたことのあるだけで、是非あの女をと思ひ込んでゐたのではないのだから、略々極つてゐたこの縁談が破れたつてどうでもいゝやうな訳だ」(146頁)とあるように、恨みの内実は縁談の破談にあるわけではない。

自墮落な生活を一変する所縁として女房を取る気になつて勇み立つてゐた鼻先を、無残にも不思議な運のためにへし折られたのが忌々しかつたが、老婆こそその不思議な運の侍女のやうに思はれるのであつた。……目には見えない意地くね悪い運に対して憤怒の拳を揮ふことが出来ないのが口惜しくなればな

るほど、洒あへと生きてゐてこの地上に蠢いてゐる老婆を自分の相手にしなければならなかつた。(146頁)

藤田もラスコーリニコフ同様、彼を支配する「不思議な運」「意地くね悪い運」を老婆に投影し、憎悪を燃やす。やがて藤田の内面世界では、「皺枯れた老婆の悪相が怪物のやうな目付をして腰を据ゑてゐた」(148頁)、「浮世に甲羅を経て、他人の腹の中の思ひなどを何とも感じなくなつてゐる老婆に、此方の思ひを思ひ知らせるには、刃物か何かでその皺だらけの皮膚を削るか筆るかしなければならぬと感ぜられた」(154頁)として、「皺」によって特徴付けられる記憶の中の老婆への猟奇的な感情が高まっていく。そして、「毎日かうしてゐる間に、この思ひに生命の根も幹も次第に末枯れさうに思はれた」(164頁)と「神経症的な不安」に苛まれるようになる。

さて、このような老婆殺しの系譜に置いたとき、『羅生門』の次の件もまた、一つの典型的な近代的青年の語りとして照射されることになる。

その髪の毛が、一本づゝ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづゝ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊があるかも知れない。寧ろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。(150頁)

語り手が「下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかつた」(150頁)と留保をつけているように、老婆の行為と「あらゆる悪」の間には因果関係はない。このような下人＝青年の老婆に対する不可解な憎悪の暴発は、これまで見てきた『罪と罰』や『老婆殺し』の展開と酷似している。下人自身の「盗人になるより外に仕方がない」(147頁)という思考を含めた「あらゆる悪」はこの老婆に投影され、下人はそれを「狃ぢ倒した」ことによって「安らかな得意と満足」(151頁)を得る。このとき老婆は、下人＝「己」の影として構成された他者に他ならない。

つまり、引用文中の下人の「はげしい憎悪」は、老婆の行為に起因する感情ではない。そもそも下人は、四五日前に「永年、使はれてゐた主人から、暇を出された」(146頁)ために「行き所がなく、途方にくれて」(同前)

いたが、「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇気が出ずにゐた」(147)。その積極的には肯定しがたい自身の負の部分、「悪」に属する欲望を、彼は偶然出会った一人の他者——〈若い〉〈男性〉である下人に対して副次的なジェンダー／エイジング・カテゴリーに属する老婆——に投影したに過ぎない。下人の主観において「あらゆる悪」の化身へと転化したこの老婆の存在により、「下人は、さっき迄自分が、盗人になる気でゐた事なぞは、とうに忘れてゐる」(150頁)、すなわち自己の「悪」を否認した新たなアイデンティティを獲得する。そして、このような下人のアイデンティティの闘争が孕む暴力性を覆い隠し、被害者の老婆こそがあたかも「彼を負の世界へ、だが同時に生の世界へいざなうメフィストフェレス」⁴²であるかのような印象を与えているのが、〈老いた〉〈女性〉に対するネガティブな感情を多分に含んだ語りである。伊藤一郎氏の指摘するとおり、「〈作者〉は読者に下人との同化を促し、この醜悪な老婆の形容が〈作者〉の客観的説明か下人の主観的印象かを区別する道をふさいでしまう。(略)初めて彼女が登場したころから、老婆に感情移入し同化しようするためには、読者はこの語りの仕組に乗り切れないほどの老人に対する同情心——老人は労わるべきであるという良俗——の強固な持ち主でなければならない」⁴³。この意味において、「作者」を自称する語り手は、老婆に加害する下人と共犯関係にあると言える。

だが同時に、テキストには下人の欲望や行為を注意深く相対化する語りも織り込まれていることに留意したい。「合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかつた」という一文のほか、老婆の言葉とされる「成程な、死人の髪を毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ」(152頁)以下の語りは「老婆は、大体こんな意味の事を云つた」(153頁)という「直接話法でありながら間接話法的な不思議な」⁴⁴形式で語られている。白鳥の『老婆殺し』には、老婆の言葉を直接話法で長々と語った後、「こんなことを息子相手に話してゐるらしく、藤田は空想してゐた」(154頁)として、それが藤田の妄想であったことを示す箇所があるが、『羅生門』の韜晦的な語りもまた老婆の言葉が下人の妄想か聞き間違い、あるいは少なくとも曲解に過ぎないことを仄めかすものであるとは言えないだろうか。そうした可能性を否定し切れないほど、ここまでの下人の老婆に対する感情は不安定で理不尽なものであり、また「どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでゐる違はない。選らんでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである」(147頁)という下人自身の葛藤と、偶然

出会った老婆の「せねば、餓死をするのぢやて、仕方がなくした事である」(152頁)という言葉は、あまりにも正確に呼応している。下人は、この妄想とも現実ともつかぬ老婆の言葉に対して「きっと、さうか」(153頁)と答えてから、換言すれば「盗人になるより外に仕方がない」という自己の思考が他者の言語として外在化されたときに初めて、自ら「引剥」＝「悪」の行為に及ぶ。そして「あらゆる悪」を投影された老婆は、「メフィストフェレス」として徹底的に他者化されたまま、醜悪な「屍骸の中」(154頁)に一人取り残される。

おわりに

以上、一九世紀末から二〇世紀初頭の老婆表象の系譜のなかに『羅生門』を位置づけることで、グロテスクな視覚的・聴覚的表現と、下人の心理、そして加害行為という三つの要素がテキストにおいて連結される回路には、同時代的なジェロントフォビアの問題が内包されていることを明らかにしてきた。最後に、より大局的な歴史的な文脈にこの読みを配置して、論を閉じたい。

大正初期の「個人主義」流行に着目して『羅生門』の読者論を展開した渡邊拓氏⁴⁵によれば、『羅生門』が発表された一九一五年前後は「どの雑誌を見ても「個人主義」「自我」「個性」などの文字があふれている」という。渡邊氏はこれらの「個人主義」が要請された背景として、「こういう経済争覇戦(大正期の「世界経済争覇戦」—引用者注)のためには、自己管理をする主体、自己の心理を見つめる主体が必要とされたのである。それは労働者よりもまずブルジョア自身に求められたものだったはずである」と述べ、さらに「心理的個人を提示する芥川の作品は当時のこうしたブルジョアジーの要求にあるいは合致していると考えられる」と指摘する。

『羅生門』が読者の「主体」形成の要求に応えるものであったという指摘は、〈老いた〉〈女性〉の他者化という本稿の文脈に照らしても興味深い。このような見方においては、『羅生門』における老婆をめぐる語りは、市民社会における排除の構造のアレゴリーとなる。ブルジョワジーの青年たちのアイデンティティ確立のプロセスにおいて、影として構成された他者、そのひとつが〈老いた〉〈女性〉という二重の副次性を帯びた「老婆」であった。

注

- 1 ジェロントフォビアについての記述は、エリザベス・ライト編『フェミニズムと精神分析事典』(多賀出版、二〇〇二・一、原著一九九二)、アードマン・B・パル

- モア／鈴木研一訳『エイジズム—高齢者差別の実相と克服の展望』第二章「エイジズムの諸形態」(明石書店、二〇〇二・九、原著一九九九)など参照。
- 2 注1の『エイジズム—高齢者差別の実相と克服の展望』81頁
 - 3 『古典と近代作家—芥川龍之介』第二章「羅生門」(一九六七・四)50頁
 - 4 「『羅生門』試論」(大阪女子大学国文学科「女子大文学 国文篇」一九八〇・三)
 - 5 『芥川龍之介の歴史小説』『羅生門』—一生の摂理』(教育出版センター、一九八三・六)
 - 6 「芥川龍之介『羅生門』—〈髪〉に纏わる〈蛇〉と〈女〉」(『日本近代文学』一九九五・五)
 - 7 岩上順一『歴史文學論』「諦念の哲學 「羅生門」「鼻」「芋粥」について」(中央公論社、一九四二・三)
 - 8 三好行雄『羅生門〔鑑賞〕』(『解釈と研究 現代日本文学講座 小説5』三省堂、一九六二・四)
 - 9 高橋陽子「『羅生門』と『偷盗』」(日本女子大学大学院の会「会誌」一九八〇・九)
 - 10 「古典—身体の回路」(『解釈と鑑賞別冊 芥川龍之介—その知的空間』二〇〇四・一)
 - 11 引用は新日本古典文学大系『今昔物語集五』(一九九六・一)による。
 - 12 「芥川龍之介『羅生門』—〈髪〉に纏わる〈蛇〉と〈女〉」(『日本近代文学』一九九五・五)
 - 13 「『羅生門』『安達ヶ原』」の引用は臨川書店の復刻版(一九七一・一〇)による。
 - 14 女性家事使用人の歴史的変遷と小説テキストにおける乳母表象の連関性については、拙稿「『坊っちゃん』にみる再生産労働のポリテクス—〈下女〉／〈奥さん〉／〈婆さん〉」(『人間文化論叢』二〇〇五・三)で既に論じた。
 - 15 引用は『日本近代文学大系第四巻 二葉亭四迷』(角川書店、一九七一・三、83頁)による。
 - 16 山下悦子『マザコン文学論』第一章「『母』への抵抗—徳富蘆花『不如帰』」(新曜社、一九九一・一〇、28頁)
 - 17 引用は日本近代文学大系『北村透谷・徳富蘆花集』(角川書店、一九七二・八)による。
 - 18 引用は復刻版『定本 花袋全集』第一巻(臨川書店、一九九三・四)による。
 - 19 『生』における高齢女性の身体描写については、別稿の用意がある。
 - 20 赤坂憲雄『新編 排除の現象学』第二章「浮浪者／ドッペルゲンガー殺しの風景—横浜浮浪者襲撃事件を読む」(筑摩書房、一九九一・八)69頁
 - 21 注19に同じ。
 - 22 田山花袋『東京の三十年』『『生』を書いた時分』(博文館、一九一七・六)
 - 23 民法論争における扶養権利義務をめぐる議論については、星野通『明治民法編纂史研究』(ダイヤモンド社、一九四三・九)、小野義美『近代日本における私的扶養の法構造(一)～(三)』(『宮崎大学教育学部紀要』一九七八・一〇、一九八〇・三、一九八一・三)、白石玲子『近代日本の家族法・家族政策における老人の位置』(利谷信義・大藤修・清水浩昭編『シリーズ家族史5 老いの比較家族史』三省堂、一九八〇・八)など参照。
 - 24 法的言説と『生』の老母像の連関性については、稿を改めて論じたい。
 - 25 引用は『岩野泡鳴全集』第一巻(臨川書店、一九九四・一二)による。
 - 26 引用は『徳田秋声全集』第七巻(八木書店、一九九八・七)による。
 - 27 注5に同じ。
 - 28 注5に同じ。
 - 29 枝川昌雄訳『恐怖の権力—〈アブジェクション〉試論—』(法政大学出版局、一九八四・七、原著一九八〇)
 - 30 注20に同じ。
 - 31 注5に同じ。
 - 32 大場恒明「『羅生門』に関する一つの仮説—英訳本*Crime and Punishment*との比較の試み」(『日本女子大学紀要 文学部』一九八五・三)
 - 33 宮坂覺「芥川龍之介とドストエフスキー—「罪と罰」の「羅生門」への変奏」(『キリスト教文学』一九九七・五)
 - 34 注32の「『羅生門』に関する一つの仮説—英訳本*Crime and Punishment*との比較の試み」および野村喬「解説」(『内田魯庵全集』第十二巻、ゆまに書房、一九八四・四)によれば、魯庵が定本とした「ヴキゼツテリ社印行」の英訳本は、Walter Scott版と同じものであるという。
 - 35 『罪と罰』の引用は『内田魯庵全集』第十二巻(ゆまに書房、一九八四・四)による。
 - 36 注33に同じ。
 - 37 竹腰幸夫「『羅生門』の老婆」(『静岡近代文学』一九八八・七)。ほか、伊藤一郎「傀儡としての〈作者〉」(『芥川龍之介・第1号』洋々社、一九九一・四)、前田角藏「『羅生門』論—老婆の視座から」(『日本文学』一九九六・二)も同様の指摘をしている。
 - 38 注37の「『羅生門』論—老婆の視座から」は下人について、「うす汚れた老婆の着物を剥ぎとっていったところで売れる見込みなどあろうはずがなく、乱世を生きるにはあまりにも幼稚な生活感覚、知恵しか持ち合わせのない〈軽薄〉な青年」と述べている。
 - 39 注1の『エイジズム—高齢者差別の実相と克服の展望』
 - 40 老婆殺しのモチーフは、江戸川乱歩『心理実験』(短篇集『心理実験』所収、春陽堂、一九二五・二)などの探偵小説にも採用されている。なお、高橋修『近代日本文学の出発期と「探偵小説」—坪内逍遙・黒岩涙香・内田魯庵』(吉田司雄編『探偵小説と日本近代』青弓社、二〇〇四・三)は、「じつは、坪内逍遙の『小説神髓』以降、「文学」的小説の中心に置かれてきた「人情的小説」(「心理的小説」と「探偵談」は涙香の述べるようにそう隔たっているわけではないのである。むしろ、「探偵談」「犯罪小説」的な要素が新たな小説の傾向を作り上げていったということもできる。この意味で、魯庵の意図と裏腹に『罪と罰』の翻訳

は「文学」と「探偵小説」を架橋する位置にあったといえよう」(99-100頁)と指摘している。

41 引用は『正宗白鳥全集』第七卷(福武書店、一九八四・五)による。

42 注8に同じ。

43 注37の「傀儡としての〈作者〉」

44 注37の「傀儡としての〈作者〉」

45 渡邊拓「『羅生門』について」(『論樹』一九九四・九)

〔付記〕 芥川龍之介のテキストの引用は『芥川龍之介全集』(岩波書店、一九九五・一一～一九九八・三)による。

なお、本稿は、平成18年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。